

『我らが共通の友』における騙しのテクニック

水野 隆之

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の『我らが共通の友』(*Our Mutual Friend*, 1864-65)¹⁾は、月刊分冊の形式で発表された後、単行本として出版された。その際ディケンズは生涯で初めて「作者あとがき」を付し、その冒頭でこう述べている。

この物語を考案した時に私が予想したのは、まさに私が苦心して示唆しようとしたこと、すなわち、ジョン・ハーモン氏は殺されたのではなく、ジョン・ロークスミス氏が彼であるということ、私が苦心して隠そうとしていると考える読者や批評家もいるだろうということでした。(中略)

あの最初の事件から生じ、それを最後には楽しく有益な話へと変えるもう一つの意図を長いこと怪しまれずに、たえず練り上げていくことは、私が計画した中でもっとも面白くもあり、同時にもっとも困難なものでもありました。(798)

前半は、主人公のジョン・ハーモン(John Harmon)が、許婚のベラ・ウィルファー(Bella Wilfer)が結婚に値する人物かどうかを事前に確かめるために姿をくらし、ジュリアス・ハンドフォード(Julius Handford)、そしてジョン・ロークスミス(John Rokesmith)と名を変えたことへの言及である。それをディケンズが予想したように、「隠そうとしている」と考えるかどうかは読者次第だろう。それよりも注目すべきは、後半でディケンズが述べている「もう一つの意図」である。これはボフィン(Boffin)の芝居に言及したものだ。ディケンズの小説に登場する無邪気で心優しい人物の典型であったボフィンは、ハーモン家の財産を相続した後、だんだんと傲慢で欲深い人物に変貌していく。実はそれが、富による墮落をベラに見せつけるために、ロークスミスと仕組んだボフィンの芝居であったことが後に判明する。H. M. ダレスキイ(H. M. Daleski)が「この小説の読者でボフィンに騙されない者がいるだろうか」²⁾といみじくも言っているように、ここで読者はいわばディケンズの計略にまんまとはめられた形になる。読者は正体を隠したロークスミスの芝居を見ていたのだと思うのだが、実はボフィンの芝居を、それが芝居であるとは全く疑わずに見ていたことになるからだ。では、ディケンズはどのような手順を踏んで読者を欺くことに成功したのだろうか。この小論では、ディケンズ自身認めている「苦心」の跡を検証し、彼の騙しのテクニックを考えてみたい。

ディケンズが凝らした工夫としてまず挙げておきたいのは、読者に騙されていることを

全く気付かせなかった点である。これは当然のことかもしれないが、驚くべきはその手法である。通常どんなことであれ、誰かを騙す場合、秘密が存在すること、そして騙す側は騙される側にそれを伏せておくことが前提となる。しかし、この小説ではそうではない。ディケンズは、物語の進展を左右する秘密や策略を積極的に読者に開示するのだ。『われらが共通の友』には、秘密や企みごと、陰謀が数多く存在する。ラムル(Lammler)夫妻はお互い資産家と偽って結婚し、新婚旅行の時にお互い騙し合っていたことを知るが、二人はその後世間に対し資産家を演じ続けることや、ライア(Riah)を隠れ蓑に悪事を企むフレジビー(Fledgeby)など、その例を挙げればきりが無い。しかもそういった行為は、ボフィンの芝居を除き、「登場人物によって読者の面前でなされる」³ディケンズはあっさりとその舞台裏を読者に見せてしまうのだ。この点がこの小説の大きな特徴である。これは冒頭に引用した「作者あとがき」でディケンズが述べているように、ジョン・ハーモンについても当てはまる。「『われらが共通の友』の中心的秘密でさえも、読者からは秘密になるようには意図されていない」⁴のである。語り手は、少しずつジョン・ハーモン、ジュリアス・ハンドフォード、ジョン・ロークスミスの三人が実は同一人物であるという秘密を明かしていく。ともすればこれは読者の興味をそくような行為に思われるかもしれない。しかしディケンズが読者の反応を予想していたこと、さらに「苦心して示唆しようとした」と述べていることから、ディケンズは意図的にこの秘密を明かしていることが分かる。つまり、これはディケンズの戦略に基づいてのことなのだ。

ジョン・ハーモンが最初に登場するのは、第一巻第二章である。そこで彼は「どこから来る男」(23)として紹介される。ごみ山で財を成した男が亡くなり、勘当されていた息子ジョン・ハーモンが、遺産を相続するために外国から帰国することになった。しかしその相続には一つ条件が付けられていた。それは父親があらかじめ定めた娘ベラ・ウィルファーと結婚することであった。そしてもしベラと結婚しなかったら、遺産は全額ハーモン家の使用人ボフィンのものとなると遺言で定めていた。ところが、帰国したジョン・ハーモンはテムズ川で死体となって発見されたという知らせが、モティマー・ライトウッド(Mortimer Lightwood)のもとに届く。事実を確かめにモティマーとユージン・レイバーン(Eugene Wrayburn)は、死体を発見したガファー・ヘクスサム(Gaffer Hexam)の家へ向かう。そこで謎めいた人物ジュリアス・ハンドフォードに遭遇する。彼は警察でジョン・ハーモンと確認された死体を見て動揺を隠すことができない。ジュリアス・ハンドフォードはその後姿をくらし、以後登場することはない。

第一巻第四章ではベラが自分の家で、ジョン・ハーモンが死んだことで自分が結婚することなく未亡人になったこと、そのために遺産相続の見込みがなくなったことを嘆いている様子が描かれる。そこにジョン・ロークスミスと名乗る若者がやってくる。彼はウィルファー家に下宿することとなった。この章の最後で語り手はこう述べる。

最後の点は一番不満な点として、彼女は大いに強調した。そしてもしジュリアス・ハンドフォード氏に双子の兄弟がこの世にいて、ジョン・ロクスミス氏がその人だと知っていたなら、もっと強調していたかもしれなかった。(51)

ここで語り手は早々にハンドフォード＝ロクスミスという秘密を読者に仄めかしてしまう。そしてロクスミスとハーモンの関係についても少しずつヒントを与えていく。それらのヒントは、ロクスミスがごみ山に向ける興味深げな眼差しや、書記としてボフィン宅で働くことになったロクスミスがまるで自分のことのようにボフィンの遺産相続手続きを熱心に進めていく姿勢、それに子供時代のジョン・ハーモンにとって「唯一の光」(326)であったというボフィン夫人に対し、ロクスミスが示す「若者の母親に対する態度」(328)などに表わされている。ディケンズはそれとなくロクスミス＝ハーモンという情報を読者に提供するのだ。そして第二巻第十三章において再度ロクスミスとジュリアス・ハンドフォードが似ていることに言及してから、ロクスミスの独白を導入する。後述するように、ロクスミスの独白を通して読者はこの秘密の全容を知ることになる。『我らが共通の友』を初めて読んだ時、どの段階でロクスミスの正体を見抜くかは、読者によって区々であろう。勘の鋭い読者であれば、最初にロクスミスが登場した時点でそれとなく感づき、三人を結び付けられるかもしれない。そこまで目敏くなくても、読者は語り手が少しずつ提供する断片的な情報をつなぎ合わせ、遅くともロクスミスの独白が終わるまでには全てを知ることになる。そしてこれは物語がまだ半分ほどしか進行してない段階なのだ。

このようにディケンズはロクスミス以外の登場人物が翻弄される秘密を読者に積極的に提供する。つまり、読者に関しては、ある意味で騙しの前提が覆されているのだ。読者を最終的に欺くことになるこの小説は、まずは読者に秘密を教えることから始める。その意図はどこにあるのか。もちろん、読者はこの段階では自分が騙される過程にあることは知らない。ロクスミスの正体を知るのは、語り手とロクスミス本人、それに読者だけである。そしてここで読者はある錯覚をすと思われる。読者自身、秘密を見透かし、他の人物よりも有利な視点から物語の進行を見守っているという錯覚である。この錯覚を読者に引き起こすことがディケンズの意図と考えられる。これが読者を騙す第一段階と言える。ディケンズが「作者あとがき」で述べたような疑問を抱く読者はいるかもしれない。しかしその疑問を抱きながらこの小説を読み進める読者は、すでにディケンズの意図を見誤っていることになる。疑問を抱いた時点でディケンズの策に陥っているのである。

この小説は「首尾一貫した一つの語り声という概念を否定している」⁵とジェイムズ・ディヴィズ(James A. Davies)が言うように、語り手が登場人物の中に入っていく、その人物の視点から語ることもこの小説の特徴と言える。そして登場人物の見る行為や目の動き

が強調される。例えば、リジー(Lizzie)・ヘクサムを見つめるユージンの目やフレジビーの悪事を見抜くジェニー・レン(Jenny Wren)の目などである。本論で扱うロークスミスとベラの結婚に至る物語とそこで演じられるボフィンの芝居という観点から見ると、この手法の効果が明確になる。そしてここで重要になるのが、ロークスミスとベラの視点である。ディケンズは騙す側と騙される側の両方の視点から語り、それによって読者を欺くことに成功したのだ。まずはロークスミスの視点から考えてみる。

ロークスミスにおいて顕著なのが人物を見る行為、とりわけベラを見る行為である。二人が初めて会った時、彼はベラを注意深く見つめる。

ベラが署名する番になった時、ロークスミス氏は座っていた時と同じように、テーブルの上にためらいがちに手を置いて立っていたのだが、こっそりと、しかしまじまじと彼女を見た。かわいい姿が契約書の上に身をかがめて「どこにサインするの、パパ？この隅でいいの？」と言うのを見た。美しい茶色い髪の毛がなまめかしい顔を覆うのを見た。サインが一気にのびのびと書かれるのを見た。女性にしては力強い字体だった。それから二人はお互いを見た。(47)

この段階では読者はまだロークスミスの正体を知らないなので、彼がベラを注視する理由は分からない。しかし、「見た(looked)」という語が繰り返し使われ、彼のベラをこっそりと注意深く観察する行為が強調されていることが分かる。そしてここでベラの容姿や行動が述べられているが、それはロークスミスが見たものである。つまり、読者はロークスミスの視点を通してこの場面を見ていることになる。そもそもロークスミスが正体を隠したのは、「割り当てられた妻を見て、判断したい」(361)と思ったためであった。彼はそれを早速実行に移したのである。このベラをこっそりと見る行為は、ロークスミスが正体を隠していること、そしてベラの人格を見極めようというロークスミスの意図の表われと見なすことができる。

また、思いもかけず手に入れた財産を、本来それを手にするはずだったベラと一緒に分かち合いたいとボフィンは考え、ロークスミスがその意向をベラに告げた時の様子はこう述べられている。

またこっそりと彼女を見つめた時、野望がかなったと勝ち誇る表情が彼女の顔に浮かび、どんなに冷静を装っても隠しきれないのを彼は見た。(205)

ここでもロークスミスはベラをこっそりと見る。さらにそれだけでなく、ロークスミスは財産を手に入れる見込みができたことを勝ち誇るベラの胸の内までも見透かしているかのようである。つまり、ここでの彼の視点はいわば全知の語り手と同じ次元にあると言える。

そのため、読者はロークスミスの視点は正しいと信用することになると考えられる。

ロークスミスの視点が全知の視点と同じ次元にあることを読者に最も意識させるのは、彼の独白である。キャサリン・ウォーターズ(Catherin Waters)が「ロークスミスは第二巻第十三章において一時的に語りを引き継ぐ」⁶と端的に指摘しているように、ロークスミスの独白は、全知の語りと同じレベルになる。これまで人物を見てきたロークスミスは、この独白の中では自分自身について記憶をたどりながら語り出す。いわばここで彼は「一種の小説家、少なくとも一つのプロットとストーリーの創作者」⁷となるのだ。そしてここでジョン・ハーモンはベラを観察するために最初からしばらく姿をくらますつもりだったこと、テムズ川で発見された死体はジョン・ハーモンではなく、彼とよく似た航海士ジョージ・ラドフット(George Radfoot)であったこと、ハーモン自身殺されかけ、テムズ川に投げ出されたこと、その後ハーモンがジュリアス・ハンドフォード、そしてジョン・ロークスミスと姿を変えた経緯やその意図、そして最終的に正体を明かさずにベラに求婚する結論に至ったことなどがロークスミスの口から詳細に語られる。この独白によって、正体を隠しているために他の人物には不可解な人間に感じられるロークスミスの秘密を、読者は全て知ることになる。

この独白はどのような効果を読者に及ぼすだろうか。オードリー・ジャフィ(Audrey Jaffe)は「読者がこの小説の全知の視点を共有していると確信するのは、とりわけジョン・ハーモンの企てを知っているためである」⁸と指摘している。さらにジャフィは、ディケンズは「人物とプロットの構成にまで読者が関与しているという幻想を作り出すために、ジョン・ハーモンという人物を利用している」⁹と論を続ける。つまり、先に述べた読者の錯覚は、ロークスミスの独白によって確信に変わるのである。読者は語り手から他の人物が知り得ない情報を提供され、自分が全知の語り手と同じ立場にいると錯覚する。さらに秘密の核心人物であるロークスミスが自分の記憶をたどりながら語るために、読者は語り手と一緒にジョン・ハーモンの物語を作り出しているような気になるのだ。この「幻想」を読者に生み出すことがディケンズの狙いだったと考えられる。

ディケンズはロークスミスの視点を利用して他の人物が知らない秘密を明らかにし、彼の視点の正しさを証明することで読者を信用させ、読者との信頼関係を築いていく。そしてこの段階で語り手、ロークスミス、読者の三者によるベラを騙す共犯関係のようなものを作り出すと言える。しかしこれは読者の「幻想」に過ぎない。読者はこの「幻想」に後々まで縛られることになる。

ロークスミスの独白以降、彼の視点は目立たなくなる。そしてそれに代わって表に出てくるのが、ベラの視点である。もちろんそれ以前でもベラの視点から語られることはあるが、ロークスミスの独白以降にその傾向が顕著になる。これは物語の展開において必要が

あつてのことであり、当然ディケンズの明確な意図に基づいている。そしてこの視点の変化が読者に不自然に感じられないよう、ディケンズはきちんと工夫を施している。この段階でロークスミスが視点が目立たなくなるのは、「ジョン・ハーモンは永久に戻ってくることはない」(367)と決心した上でベラに求婚し、断られて落胆したロークスミスの意識の表われである、と読者は想像するのだ。そのためにロークスミスが視点が目立たなくなっても、読者は違和感を覚えることがない。さらに結婚した後の二人の生活もベラの視点から語られるが、これは単にロークスミスがベラに正体を隠しているというだけではない。ロークスミスはベラを見定めるといふ目的があった。そしてベラが富に汚されることのない純真で善良な心の持ち主であることが証明できたため、ベラがどのような人物か見極める必要がなくなったのである。このように、周到な計算に基づいて、ロークスミスの視点からベラの視点へと無理なく移行させるのである。

ベラの視点は、ボフィンの芝居を成立させる上で重要な意味を持っている。ヒラリー・ショー(Hilary M. Schor)は、ロークスミスとボフィンのベラに対する秘密の計画は「小説の大半を通して、我々が同一視し 我々がその目を通して見ている 人物へのトリック」であり、「この小説が成功するのは、我々が彼女と自分を同一視する場合のみである」¹⁰と述べている。つまり、読者が騙される前提として、読者＝ベラの関係が成立すること、すなわち、ベラが見、ベラが語ることを読者が信用し、ベラが感じるように読者も感じる必要があるのである。

ベラの視点で重要なのは、守銭奴と化したボフィンの様子を語る点である。第三巻第四章でベラは父親に「ボフィンさんがお金のせいでだめになりそうなの。日ごとに変ってきているの」(455)と打ち明ける。ここで初めて読者にボフィンの富による墮落が告げられる。次の章では、ボフィンの変化について具体的に述べられるが、その冒頭はこうである。

ベラ・ウィルファールの機転の利く賢い頭が過ちを犯したのだろうか、それとも黄金のごみ屋が耐久検査の炉を通り抜けたら、鉄くずになっていたのだろうか？悪事千里を走るという。我々はすぐに知ることになる。

楽しい記念日から戻ってきた日のまさにその晩に、あることが起き、ベラは目と耳でそれを注意深く追った。(456)

ここで語り手からベラへと視点が変わり、ベラの視点が本格的に導入される。それにより、ここで描かれる内容はベラが見聞きしたものという枠組みを設定しているのである。そしてロークスミスに傲慢な態度を取るボフィンは、ベラが見たものとして読者に示される。この章ではここで引用した箇所以外にも彼女の目の動きへの言及がなされる。

書記は立ち上がり、書類をまとめて出て行った。ベラの視線はドアまで彼を追い、悦

に入って安楽椅子にもたれ掛かるボフィン氏に留まり、それから自分の本の上に落ちた。
(458)

このようにボフィンの墮落はベラの視点を通し、読者に伝えられる。そしてこの場面やボフィンがロークスミスを解雇する場面なども、ベラが目にしたものとして読者に語られる。読者はこれらの場面を読み取る時、頼るのはベラしかいない。騙す側のロークスミスとボフィンは読者には何も語らず、一緒に演じているだけである。つまり、ここで読者は騙される側の人間になり、ベラと一緒に、ボフィンとロークスミスの芝居を見ていることになる。ベラの視点を信用することが前提と述べたが、ディケンズはボフィンの墮落を判断する手段としてベラの視点以外は何も与えなかったのであり、読者は彼女の視点を信用せざるを得ないのだ。

しかし、ベラは騙される側の人間であって、ロークスミスのように秘密を掌握し、時に全知の視点に立つ人物ではない。ゆえに、当然ベラの視点には限界がある。先に見たようにボフィンの墮落に関しては、読者はベラの見たものを読み取り、そこから判断せざるを得ない。換言すれば、ベラの見えないものは読者も見えないのである。そしてディケンズはベラが見えないということは何気なく仄めかしている。例えばベラとロークスミスの次の会話を見てみよう。

「だから」とベラは言った。「あの人の話は大変しづらいのです。でも あの人はあなたをきちんと扱っていますか？」

「どう扱っているかあなたは目にしているでしょう」書記は忍耐強く、しかし誇らしげに答えた。

「ええ、見ていてつらいのです」ベラは力をこめて答えた。(512)

ロークスミスがベラに言うように、ベラはボフィンのロークスミスに対する傲慢な振る舞いを実際に目にしている。そして読者もベラを目を通して知っている。一方、ロークスミスはそれについての明言を避け、その判断をベラに任せる。ここでの会話の示唆するものは、文字通りベラは「目にしている」のではなく、ベラにはそれがロークスミスとボフィンの芝居だということが見えていないということである。ベラは不完全な視点であり、全知の語りを引き継ぐロークスミスの視点とは違うのだ。このようにディケンズは暗にベラの視点の欠陥を指摘するのだが、もちろん、読者はこの段階ではそこまで読み込むことはできないのである。

ボフィンがロークスミスを解雇した時、ベラは傲慢なボフィンに我慢がなくなり、財産を放棄してボフィンのもとを去る。そして一度は断ったロークスミスと、彼こそがジョン・ハーモンだとも知らずに結婚する。二人が結婚したことで、いつ、どのようにして

ベラがロークスミスの正体を知ることになるかが読者の主な関心となる。読者とベラはボフィンの芝居に騙されるが、読者とベラの間には、読者はロークスミスの正体を知っているがベラは知らないという決定的な違いがある。このために読者とベラの認識にはずれがある。読者はロークスミスの正体に関しては、全知の語り手と同じ立場にあると考えているからだ。先に述べた有利な視点から見ているという読者の「幻想」がここでも働くのである。ベラは結婚後、ロークスミスの素性に疑問を抱き、何度か彼を問いただすが、ロークスミスから明確な答えを引き出せない。無論、読者はその答えを知っている。ロークスミスはモティマーと顔を合わせるのをこれまでずっと避けてきて、ベラはそれを訝るが、その理由を読者は知っている。ある日、二人はモティマーに偶然出くわし、ロークスミスこそが行方不明となったジュリアス・ハンドフォード本人であるとロークスミスとモティマーから告げられ、ベラは驚くが、読者は驚かない。その夜、ジュリアス・ハンドフォードの行方を追っていた警部が二人の家にやって来て、ロークスミスと密談するが、ベラはその中身を知らない。そして読者にも明かされないが、その中身の想像はつく。ロークスミスは自分が正体を隠した意図を警部に語り、ベラにはそのことをまだ秘密にしておいてほしいと恐らく頼んだであろう。ここがベラと読者の違いであり、ここでも読者はベラより優位な立場にいると錯覚するのである。そして三人で警察署へと向かうが、そのときの様子はこう描かれている。

警部がこれまで以上に自分のほうに目を向け、たまたま二人の目が会うと万事お見通しというように眉を上げ、まるで「分かりませんか？」と問いただすかのようなので、彼女はますます怖くなり、その結果ますます途方にくれたのだった。(743)

ここでもベラが見えていないことが強調されている。しかしこの場面では、先に引用した例とは違い、読者はベラが見えていないことが分かっている。そしてディケンズはこのような場面でも、読者の「幻想」を利用していると考えられる。読者も警部と一緒に「分かりませんか？(Don't you see?)」とベラに言っている気分にさせるのだ。この「幻想」のために、読者がボフィンの芝居を知った時の驚きはそれだけ大きくなるという効果が生まれるのである。

このように視点の中心となる人物がロークスミスからベラに移る。ロークスミスは全知の語り手の役割も果たす一方、ベラの視点は、騙される人物ゆえに見えないことがある。そしてこのために、読者の置かれる立場も変化する。前半では秘密が徐々に明らかにされ、読者は秘密の核心部(ロークスミスの正体)へと導かれていく。しかし、後半では読者は秘密の核心部(ボフィンの芝居)には入っていきえず、外側から眺めているだけである。そ

の結果、読者にとって判然としない場面、後になって納得させられる場面が多くなる。それらはボフィンの芝居に起因するものであるため、ボフィンの墮落が芝居であったことが判明して初めてその真相が明らかにされる。これも読者に悟られまいとディケンズが苦心した点と言える。その例を二つ挙げてみる。

ベラとロークスミスはベラの父親と三人で極秘に結婚式を挙げるが、そこでオルガンのあたりから衣擦れの音がし、それを聞いたベラの父親が「あれはママなんてことはないよね？」(650)とベラに囁く場面がある。この音は後に、ボフィン夫妻が隠れて式を見守っていたことの証拠として用いられるが、式の場面ではそのことは読者に明かされない。しかしディケンズは、この場面でこの音が不自然に感じられないよう細工を施すことを忘れた。ディケンズはこの音をベラの父親の不安に置き換えているのである。ベラの父親の小心ぶりを描写しているようでいて、実はそうではなかったのだ。また、この結婚式において「この人をめとるのは誰か？私、ジョンです。私、ベラです」(650)と結婚の宣誓が何気なく語られているが、ここにも、ロークスミスの正体をベラに明かさずにこの結婚を成立させるためのディケンズの工夫が見られる。それはジョンという名前である。もちろんジョンとはこの時のベラにとってはジョン・ロークスミスであるが、彼の本名はジョン・ハーモンであった。ロークスミスの正体を隠しながらも、ジョンという名を用いることで、ハーモンとベラをきちんと結婚させることができたのだ。

もう一つの例はサイラス・ウェッグ(Silas Wegg)のボフィン脅迫である。彼はベラと同じようにボフィンの芝居に騙された人物であった。ウェッグはハーモンの最新の遺言書(と彼が思い込んでいるもの)を入手し、ボフィンを脅迫する陰謀を企て、ヴィナス(Venus)と徒党を組もうとする。しかしヴィナスはウェッグを裏切り、ボフィンにウェッグの謀略を明かす。ここまでは読者も知っている。しかしそれ以外のこと、つまり、正真正銘最新の遺言書が別に存在すること、ロークスミスがすでにウェッグに用心するようボフィンに警告していたこと、ボフィンがウェッグの陰謀を自分に教えてくれたことに対してヴィナスに礼をしたこと、そしてボフィンはウェッグの脅迫に怯えているふりをしていたことなどは、読者には事前に一切語られない。ウェッグの脅迫をボフィンがどう裏で対処したかの種明かしは、ロークスミスの正体とボフィンの芝居がベラに明かされ、ロークスミス夫妻、すなわち、この時にはハーモン夫妻がボフィンの財産を譲り受けるまで先延ばしにされる。しかしこの脅迫をめぐる場面をベラは直接目にしていない。つまり、ディケンズはボフィンの芝居を通してベラだけでなく、読者の目も欺く意図があったことがここから分かる。そのため、「作者あとがき」で述べたように「長いこと怪しまれずに」この話を進める必要があった。ウェッグの脅迫は、悪人を罰する挿話としてだけでなく、ボフィンの芝居を成立させるために構成上必要なしかけとしての機能も持っていたのである。

以上見てきたように、ディケンズは緻密な計算に基づいて物語を展開していき、読者を騙すに至った。語り手はボフィンの芝居に関わることを以外は全て、秘密の核心であるロークスミスの正体までも読者に明かす。しかもロークスミスの視点を巧みに利用し、彼の口から秘密を直接語らせることで、語り手やロークスミスとともに秘密を共有し、有利な視点から物語の展開を見ているような「幻想」を読者に抱かせた。読者は物語の全てを見透かし、語り手、ロークスミスとともにベラを騙す側にいると勘違いし、何も知らないベラを見て楽しんでいる気分さえなる。しかし、ボフィンの芝居を知り、「全知であると自認してきた読者は、自分が誤り導かれ、すっぱ抜かれ、騙されていたことに気付く」¹¹のである。騙される側のベラの視点でしかボフィンの墮落を読者に見せないことで、読者はベラの視点を信用せざるを得なくなり、騙される結果になる。そしてベラの視点の限界を認識しても、語り手、ロークスミスとともにベラを騙しているという安心感、優越感があるので、読者は自分が騙されているとは露疑わない。そのために、真相を知った時の読者の驚きはそれだけ大きいものになる。

こうしてディケンズは読者に気付かれぬように、巧みに工夫しながら、読者を騙す側から騙される側に回した。その結果、読者は秘密を共有しているのではなく、ベラとともに驚きを共有することになる。「驚いて初めはすっかりうろたえてしまったが、中でも戸惑いを覚えるくらいベラをもっとも不思議がらせたのは、ボフィン氏の明るい表情であった」(749)と語られるベラの驚きは、読者の驚きでもある。その驚きが大きい読者ほど、ディケンズの術中にはまったことになり、この小説の成功を物語ることになるのだ。

¹ テクストとして Charles Dickens, *Our Mutual Friend*, ed. Adrian Poole (London: Penguin, 1997)を用いた。本書からの引用は全て本文中に頁数を記す。なお、日本語訳は拙訳。

² H. M. Daleski, *Dickens and the Art of Analogy* (London: Faber, 1970) 329.

³ Rosemarie Bodenheimer, "Dickens and the Identical Man: *Our Mutual Friend* Doubled," *Dickens Studies Annual* 31, ed. Stanley Friedman, et al. (New York: AMS, 2002) 159.

⁴ J. Hills Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (1958; Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1959) 288.

⁵ James A. Davies, *The Textual Life of Dickens's Characters* (London: Macmillan, 1989) 102.

⁶ Catherin Waters, *Dickens and the Politics of the Family* (Cambridge: Cambridge UP, 1997) 187.

⁷ Fred Kaplan, *Dickens: A Biography* (New York: Morrow, 1988) 417.

⁸ Audrey Jaffe, *Vanishing Points: Dickens, Narrative and the Subject of Omniscience* (Berkeley: U of California P, 1991) 159.

⁹ Jaffe 161.

¹⁰ Hilary M. Schor, *Dickens and the Daughter of the House* (Cambridge: Cambridge UP, 1999) 192.

¹¹ Jaffe 166.

【出典】『ふいおーちゅん』(新生言語文化研究会)第19号(2008) pp.21-31.